ラジオ「福音の光」説教
「弱さの内に注がれる神の恵み」２
コリントの信徒への手紙第二 12 章 1～10 節

姫路あけぼの教会牧師　廣田守男

私が兵庫キリスト教障害者共励会に関わった経緯は、兼清章先生との出会いにあります。共励会は、30 数年前に兵庫教区の伝道部の中の一つに各種伝道委員会があり、委員長をされていた鷹取教会の三島実郎牧師と書記の神戸聖愛教会の山口千代子牧師が、視覚障害の方々や肢体不自由者の方々のために、修養会を開きました。その後、別個に肢体不自由者の方々の修養会を開き、生まれたのが共励会で、その時の会長が相生教会の兼清章先生でした。今年で第 32 回となり、四障伝と同じような歩みでした。先生とは、私が 1971 年 4 月に神学校を卒業して、日本キリスト教団姫路福音教会に伝道師として招聘され、また牧師時代と 11 年間、お交わりをさせて頂きましたが、共励会の働きには、全然関与していませんでした。姫路福音教会の新会堂建築の時、障害者の方への配慮は、皆で困っている方があれば助け合ったらいいのではないか、と言う思想で、考えなかったのです。そのことが私にとっては、心残りなことでありました。

1986 年 11 月から、姫路の現在地で開拓伝道を始めた時に、兼清先生と再会したのです。そして私が透析を受けていることを、お知りになって共励会に出るように、お誘いを受け、色々な集会に出させていただく内に、役員になるように頼まれました。兼清先生から、健康上の理由もあり、また長いこと会長をしているので、会長を変わってほしいと頼まれました。会長には、共励会の副会長をずっとされている日本フリーメソジスト教団明石上ノ丸教会の内貴八郎右衛門牧師が適任者なので、会長になって下さいと、強くお願いしたのですが、共励会は日本基督教団の各種伝道委員会から補助金があるので、どうしても引き受けられないと言われ、私が引き受けることになりました。

兼清先生は、軍事教練を受け、姫路海軍航空隊に配属されていた 18 歳の時に、突然足の関節リュウマチになり、病院へ入院されました。何の治療もされず、また治療の方法もなく、病院を転々として、とうとう身体が悪くなって最後に別府へ行かれました。そこで療養されている時に、クリスチャンの看護婦さんから、キリスト教の話を聞いてみませんか、と声をかけられたそうです。そして、その看護婦さんが所属するナザレン教会の大江信牧師が訪ねて来られて、イエス様を信じて救われ、洗礼に与られたそうです。それから不思議なことに手術などを通して松葉杖を使って歩けるようになり、神学校を卒業され、ご結婚もされて牧師として赴任されたのが、福島県の三春教会でした。そして相生教会に赴任して牧会され、兵庫共励会の会長を引き受けられて、労されたのでした。この先生が〃喜びのいのち〃と言う本の中で書かれている〃一つの命も失われないために〃という題の文章の中で、「具体的に言いますと、先ず座ることが出来ませ

んし、地面に落ちたものを拾うことも出来ません。足を引きずらなくては歩けません。ステッキをついて歩きますが、油断するとわずか一センチ足らずの段差にも躓いて倒れかねませんし、倒れたら起きあがれませんので、歩く時に非常に緊張します。しかし、この状態で結構満足しています。障害を負う多くの友を与えられたことが、その理由の一つです。神様から、『もう一度、同じ人生を歩んでも良いか』と聞かれたらと想定しますと、即答は出来ないと思いますが、暫く考えた末、『ン、まあいいか』と自答し、『主よ。いいです。しかし、その時も支えて下さい』と言うだろうと思います。」と書いておられます。私自身も、透析という内部障害を持つことによって、新しい出会いが与えられたことを、心から感謝しているのであります。

私が、開拓伝道をしだしたのは、透析を受け出して、1 年目であります。呉の教会、特に焼山という団地に建てられた小さな教会で奉仕させて頂きましたが、既成教会におきましては、皆様方に負担をかけるので、郷里に帰って伝道する郷里伝道の思いが与えられました。自分で出来る範囲で伝道させて頂こうと言うことで、飾磨に住んでいた姉一家が姫路市内に転居し、空き家になっている家を借りて、家内と子ども三人とで生活をしながら、開拓伝道を始める機会が与えられました。そして以来 19 年目の今日を迎えております。教会としては、一時思ったように成長したのですが、今は年配の方々やご病気の方々などが多く、教勢としては落ちている状況にあります。しかし、神様を見上げて、その働きの一端に与らせてもらっています。

今、読んでいただいた聖書の中で、〃わたしの身に一つのとげが与えられました〃とあり、これはパウロにとって、どれほど大きな痛みだったろうかと思うのです。わたしは、週 3 回×5 時間で計週 15 時間、透析を 20 年間受けております。これがなかったら、もっと自由に色々なことが出来るし、これがあるために制限があって大変だろうなあ、と思われるでしょう。けれども、わたし自身は一つの生活習慣になっていて、出勤して帰ってくるのと同じような形で生活しているのです。しかし、とげというのは、やはり不自由さや痛みや制限や困難があり、戦いがあります。ともすれば、私たちを弱気にしてしまう材料には、違いありません。

茨城県の水海道市に、先天性の小児麻痺であられる伊沢記念男という先生がおられました。伊沢先生が少年の頃、ある時お祭りに行ったら見せ物になり、皆からあざけられ、非常に絶望されたのです。両親を非難し、悲しませ、痛ませる発言をされたり、自暴自棄になられて、何回も自殺しようとされました。ある時、お坊さんの所へ行き、どうしてこんなことになったのですかと聞いたら、先祖が悪いから、先祖供養をしなさい、諦めなさい、と言われ、何の解決にもならなかった。ある時、鉄道自殺をするために、線路に横たわっていると、ある教会が路傍伝道で〃さ迷える人たちよ、立ち帰れ〃という歌を賛美していたので、思わず知らずその歌声の方へ、不自由な足を引きずりながら、後について行かれて、教会に導かれ、イエス様を信じるようになられた。そしてホーリネス教団の東京聖書学院で学ぼうとされたのですが、身体障害者なので何回も拒まれた

そうです。ある日、ある山の上で修養会がされているということを聞かれて、手足を血まみれにしながら階段を上って、修養会に出席された。そして、その熱意に打たれて聖書学院での学びが許された。ところが、いざ卒業という時に、どこも招聘してくれない。どこも行き場がないので、自分の郷里で郷里伝道をされたのです。その時、新聞などで悪口を書かれ、非常に迫害があったそうです。しかし、先生はそこで伝道されて、教会が設立され、イエス様を信じて救われた人たちの中で、障害があるために、仕事が出来ない、仕事が無いという人々のために、段ボール会社を設立し、その地域で豊かに用いられていったのです。その先生が〃とげの恩寵〃という本を書かれ、あちらこちらに配られ、わたしも姫路福音教会時代に配って下さり〃とげの恩寵〃ということで説教して下さり、非常に感動したことを覚えているのです。

私たちは、指先にとげが少しでも刺さりますと、痛みます。パウロはとげを与えられ、それは高ぶらないためだと、言っておられます。そのとげが何であったかは不明です。とにもかくにも、とげがあり、これは自分を否定し、消極的にしてしまう一つの現実であり、自分を徹底的に打ちのめすサタン・悪魔である、と告白しております。これはヨハネの福音書 10 章「イエス様はよい羊飼い」の所で言う、サタンは、盗んだり、滅ぼしたり、いのちを奪うために来る、と書かれています。パウロは、そういう存在から本当に解放されたいと思って、主に三度も願いました。人間は、誰でもどうすることも出来なくて、神様に祈らざるを得ない状況に追い込まれる時があるのではないでしょうか。わたしは、透析を受けねばならなくなった時にも、開拓伝道を始めた時にも、心臓が悪く入院しなければならなくなった時にも、本当に神様に真剣に願わざるを得ない状況に立たされました。皆様方それぞれの生活の場で、深く味わい経験しておられるのではないでしょうか。

パウロは、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、窮乏、困難を経験している中から与えられた、尊いメッセージは私たちを非常に力づけ、勇気づけてくれるのではないかと思うのです。私たちも、どなたでも、本当に絶望の淵に陥れるというか、悲しく苦しい出来事があるのが、現実だと思うのです。パウロは、第三の天まで引き上げられた人を知っており、また人が口にするのを許されない、言い表し得ない言葉を耳にした、という経験をを忘れ去らせ、覆してしまうほどの痛み、本当に深い嘆きを持ったことでしょう。けれども、〃主は「わたしの恵みはあなたに充分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ。」と言われました。〃とある様に、イエス様は全部を知っておられて、パウロに語りかけられたのであります。

人間は、自分が祈った通りに行くとか、計画した通りに物事が運ぶとかすると、神様の恵みが充分に働いているんだと思い、その反対であると神様の恵みがない、顧みて下さらない、見捨てられた、等と思うのですが、これは人間の思いであって、神様の側は充分に恵みを注いでいるんだ、とおっしゃって下さっているのです。創世記 1 章に、神様が創造されたものは、すべてはなはだ良かったとあり、何も悪いものはなかった。人

間が悪としてとらえてしまうのは、神様に背き、背を向け、ひざまずかないから起こってくるのです。そして恵みを恵みとして受けとめられない。そういう理解しかできない人間の悲しい現実があるのです。神様がくださるものは、すべて充分な恵みである、ということなのです。

神様の御力というのは、人間の弱さの中において、完全に現れる。弱いからこそ、神様に信頼せざるを得ない。信頼する者に対して、ご自身の力を充分に現して下さる、ということであります。私たちは、何か大切なことをしようとする時、上手にしようと思うと自然に力んでしまい、大切な時に力が入らないということがあります。自分の弱さ、無力さ、足りなさ、愚かさ、不自由さと言うことを知り、感じて神様により頼む時に、神様の御力が完全に現れるのです。

第 2 コリント 13 章には〃キリストは、弱さの故に十字架につけられました〃という言葉があります。人間というのは、十字架を負う、苦しいこと、悲しいことに直面したり、障害を負ったり、色々なことに携わる時、頑張って障害を乗り越え越えなければならない、という思いを持ってしまいがちなのですが、イエス様が十字架を負ったのは弱さの故なのだ、即ち自分の力に頼らないで、神様の御力により頼んで、十字架を負われた、ということです。私は、私の内に働いて下さるキリストの力が分かるように、もっともっと自分の弱さを知る、小さな者とならせて下さい、と祈らされるのであります。パウロは、〃キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう、なぜなら、わたしは弱い時にこそ強いからです。〃と、告白が出来たのです。この〃誇る〃ということは、自分でガッツポーズをする時のような誇りではなく、〃頼りにする〃とか〃信頼を寄せる〃という意味があるのです。

イザヤ書 63 章 9 節に「彼らが苦しむ時には、何時も主は苦しみ、ご自分の使いが彼らを救った。その愛と憐れみによって主は彼らを贖い、昔からずっと、彼らを背負い、抱いてこられた。」とあります。これはイスラエルの民の現実に対して、イザヤが語った言葉です。彼らが苦しむ時には、何時も主も苦しむ。共に苦しんでいて下さる主。そして、私たちを背負い、抱いて歩んで下さる主。神様の恵み、そのことがここに明らかにされているのであります。私が、この言葉の一端を味わい知ったのは、高校 2 年生の時に重い腎臓病で入院していた時で、クリスチャンである母から、遠方に入院中の私にくれた一通の手紙を通して、母の愛を知ったのでした。ああそうなんだなあと、自分一人で重荷を負い、苦しみ、悩み、悲しみ、戦っているように思っても、実は主も共に重荷を負い、苦しみ、悩み、悲しみ、戦っていて下さるんだ。〃わたしは決してあなたがたを離れず見捨てない〃と、ヘブル人への手紙の中に出て来ますけれども、決して見捨てられない、見放されない、そういう中に置かれているのです。そういうイエス様を私たちは見失ってしまって、自分で、或いは自分たちで何とかしよう、他の人の力をかりて何とかしようと思って期待をするものですから、当てと突っ張りは向こうから外れるという諺のように、誰も何もしてくれないといって、がっかりしてしまう人間の弱さと

いうものを、改めて深く覚えさせられるのであります。

第1コリント1章31節〃誇る者は主を誇れ〃とありますように、本当に神様を心に、イエス様に信頼し、イエス様こそわたしのかけがえのない御方ですと、告白していくことが、大切なことであることを改めて示されるのであります。最後に、わたしの心に留まっている詩をお読みして終わりにしたいと思います。

足跡

ある人が、夜、夢を見た。
主と共に、海辺を歩いている夢を。
彼の人生の様々なシーンが、空を横切った。
それぞれの場面に応じて、砂の上に二人の足跡があった。
一つは彼のもので、もう一つは主の足跡だった。
彼の人生の最後のシーンが、映し出された時、彼は砂の上の足跡を振り返った。
彼の人生行路にそって、しばしば、たった一人の足跡しかないのに気がついた。
しかもそれは彼の人生で、最も落胆し、最も辛い時期だった。
彼は当惑して主に尋ねた。
「主よ。わたしはあなたにお従いすると決心した時、何時も共に歩んで下さると、言われたではありませんか。それなのに、わたしの人生で最も苦しかった時には、たった一人の足跡しかないのです。わたしは理解出来ません。わたしが、最もあなたを必要としていた時に、どうしてわたしをお見捨てになったかということを。」
主は答えて言われた。
「わたしの、大事な、大事な子よ。わたしはあなたを愛しており、決してあなたを、見捨てることはありません。あなたが、試みと苦難にあった時、あなたが、たった一人の足跡しか認めなかった時、それは私があなたを、背負って歩いていた時だったのです。」